

陰茎転移をきたした尿路上皮癌の1例

大田原赤十字病院泌尿器科 (部長: 池内幸一)

堀永 実, 小杉 道男, 池内 幸一

A CASE OF UROTHELIAL CARCINOMA ASSOCIATED
WITH PENILE METASTASIS

Minoru HORINAGA, Michio KOSUGI and Koichi IKEUCHI

From the Department of Urology, the Ootawara Red Cross Hospital

A 71-year-old man, who had been treated with continuous ambulatory peritoneal dialysis due to chronic renal failure for 5 months, visited our hospital with a complaint of penile induration in April, 1998. He underwent wedge biopsy of the penis. On the day after the biopsy, he had an episode of gross hematuria. Cystoscopy revealed a papillary tumor that seemed to have arisen from the right ureteral orifice and another in the trigone. Computed tomographic scan revealed the bladder tumors and swelling of the internal iliac lymph nodes. The bladder tumors were resected transurethrally. The pathological diagnosis of the specimen from the penile induration was metastatic transitional cell carcinoma.

(Acta Urol. Jpn. 45 : 713-715, 1999)

Key words: Urothelial carcinoma, Transitional cell carcinoma, Penile metastasis

緒 言

転移性陰茎腫瘍は比較的稀な疾患で、本邦ではわれわれが調べたかぎり、現在まで119例の報告をみるにすぎない。今回われわれは、陰茎硬結を主訴とした尿路上皮癌の陰茎転移をきたした1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者: 71歳, 男性

主訴: 陰茎背部の硬結

現病歴: 1998年3月頃から陰茎背側の硬結を触知するようになり、4月に当科を受診した。陰茎線維症を疑い柴苓湯を内服したが、症状改善しないため、5月生検の目的で入院となった。

既往歴: 1990年より慢性腎不全を指摘され血液透析を受けていたが、1997年12月より腹膜透析が開始された。自尿は1日約200mlで乏尿であるが、肉眼的血尿の既往はなかった。

家族歴: 特記すべきことなし

入院時現症: 身長169cm, 体重54kg。眼瞼結膜に軽度の貧血を認めた。表在リンパ節は触知せず。陰茎体部背側に15×20mmの硬結を触知したが、外見上は変形など認められなかった。

検査成績: Hb 8.3g/dl, RBC $265 \times 10^4/\text{mm}^3$, BUN 58.5mg/dl, Cr 11.1mg/dl と慢性腎不全の所見を認めた。組織ポリペプチド抗原は142U/l

(<70), SCC 抗原 4.5 ng/ml (<1.5) と高値を示した。尿細胞診は陰性であった。

入院後陰茎背面を皮切し、楔状生検を施行した。翌朝から肉眼的血尿が出現した。

膀胱鏡検査: 右尿管口部と膀胱三角部に径約1cmの乳頭状腫瘍を認めた。

単純CT: 右尿管下端と思われる部位から膀胱内にかけて、腫瘤性病変と右内腸骨リンパ節の腫脹を認めた。

6月3日に経尿道的腫瘍切除術を施行した。

病理組織学的所見: 陰茎硬結の生検組織では表層に移行上皮癌の胞巣を認めた (Fig. 1)。膀胱腫瘍は、移行上皮癌, grade 2>3, pT2 以上であった (Fig. 2)。



Fig. 1. Histopathological finding of biopsy of the penile induration revealed transitional cell carcinoma.

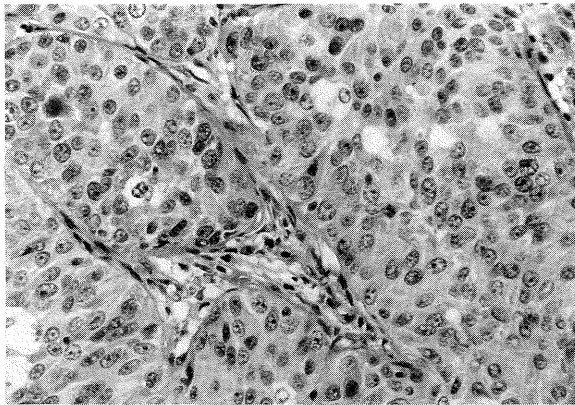


Fig. 2. Histopathological finding showed transitional cell carcinoma, grade 2>3, pT2.

陰茎硬結と膀胱腫瘍のいずれも移行上皮癌であり陰茎硬結部と膀胱腫瘍は臨床的に連続性はなく、本症例の陰茎硬結は、尿路上皮癌の陰茎転移と診断された。

治療経過：本症例は腹膜透析中の患者であり、CT上骨盤内リンパ節転移が疑われることより、家族とも相談の上治療法として UFT の内服が選択され、現在外来にて経過観察中である。

考 察

転移性陰茎腫瘍は比較的稀であり、本邦では吉川ら¹⁾が109例を集計しており、その後の報告も含め、われわれの検索しえたかぎり自験例の報告を含めて119例の報告をみるに過ぎない (Table 1)。

転移性陰茎腫瘍の来院時主訴は、陰茎腫瘍、硬結が59%と最も多く、その部位としては陰茎海绵体に孤立性結節の形態をとる事が多いと報告されている²⁾。ついで持続勃起症44%、陰茎痛26%、排尿困難14%、排尿痛5%、尿閉2%と報告されている。

転移性陰茎腫瘍の鑑別疾患は、原発性陰茎腫瘍、Peyronie disease、非腫瘍性持続勃起症、陰茎結核疹、軟、硬性下疳、ゴム腫などがあげられる。これらは早期に鑑別することにより、転移性陰茎腫瘍とは異なり治療可能と考えられるため、正確な診断が重要である³⁾。

転移性陰茎腫瘍の原発巣は、膀胱が最も多く、ついで前立腺、直腸と続き骨盤内臓器を原発とするものが多い。原発巣が泌尿生殖器系由来のものは68.6%である。欧米では約300例の転移性陰茎腫瘍が報告されており、原発巣が泌尿生殖器系由来のものは約75%である⁴⁾。

本邦での尿路上皮癌を原発とする転移性陰茎腫瘍の報告例^{1,5,6)}は42例であった。内膀胱32例、腎盂5例、尿管5例であった。平均年齢は65.6歳で、60歳以上が82.9%であった。

転移性陰茎腫瘍の転移経路は、静脈叢やリンパ管の

Table 1. Primary sites of carcinoma responsible for penile metastases in 119 cases from the Japanese literature (1934–1998)

Primary site	No. Cases	%
1. Genitourinary tract	81	68.1%
Bladder	32	
Prostate	27	
Renal pelvis, ureter	10	
Kidney	7	
Testis	3	
Urethra	2	
2. Gastrointestinal tract	24	20.2%
Rectum	12	
Stomach	5	
Esophagus	3	
Pancreas	2	
Cecum	2	
3. Respiratory tract	8	6.7%
Lung	6	
Nasopharynx	1	
Hypopharynx	1	
4. Others	6	5.0%
Skin	2	
Mediastinum	2	
Tongue	1	
Unknown	1	
Total	119	

中枢側が腫瘍細胞で閉塞され、逆行性に腫瘍細胞が陰茎背静脈やリンパ管に流れ込むことによって生じる逆行性静脈性転移、逆行性リンパ性転移が有力な経路と報告されている³⁾。本症例においては、CT 上右内腸骨リンパ節の腫脹が認められており、逆行性リンパ性転移の関与が考えられる。

尿路上皮を原発とする転移性陰茎腫瘍42例の内25例では、すでに原発巣が摘除されていた。陰茎部に対する治療は、18例に手術が施行されており、その内10例は手術だけの治療で、陰茎切断術6例、腫瘍摘除術2例、全除精術1例、陰茎全摘除術1例であった。術後化学療法を施行したのが3例、術後化学療法と放射線療法を施行したのが5例であった。手術を施行せず化学療法のみが3例、放射線療法のみが6例、化学療法と放射線の併用が5例であった。

予後は診断時にすでに他臓器転移が存在する例では、手術、放射線療法、化学療法が施行されても1年以内に死亡する症例が、記載のある13例において11例の84%であり不良であった^{1,2)}。

一方、転移巣が陰茎のみの場合には長期生存例の報告がみられる。Matthewinan ら⁷⁾は、膀胱移行上皮癌の転移性陰茎腫瘍に対して、シスプラチンとメソトレキセートによる化学療法を施行した2例と、化学療

法に手術を加えた1例の3例において, 20~27カ月再発転移を認めなかったと報告し, 積極的な治療を勧めている。

Ben ら⁸⁾は転移性陰茎腫瘍に対して, 局所の温熱療法と放射線療法の併用により, 生存期間中継続して局所の疼痛軽快に効果があったと報告している。

本症例では, 原発巣が発見された時点で陰茎転移とリンパ節転移が認められていたため, 根治手術は不可能と考えられた。全身状態を考慮し, 治療法としてUFTの内服が選択され, 現在外来通院中である。

結 語

腹膜透析中の患者に生じた尿路上皮癌の陰茎転移を経験したので, 若干の文献的考察を加えて報告した。

文 献

- 1) 吉川慎一, 金 泰正, 吉田哲也, ほか: 集学的治療が奏効した Priapism を主徴とした膀胱癌の1例. 日泌尿会誌 **89**: 788-791, 1998
- 2) 馬場克幸, 矢島通孝, 大山 登, ほか: 下咽頭を原発とした転移性陰茎腫瘍の1例. 泌尿紀要

36: 1467-1470, 1990

- 3) Abeshouse BS and Absehouse GA: Metastatic tumor of the penis: a review of the literature and a report of two cases. J Urol **86**: 99-112, 1961
- 4) Perez LM, Shumway RA, Carson CC, et al.: Penile metastasis secondary to supraglottic squamous cell carcinoma: review of the literature. J Urol **147**: 157-160, 1992
- 5) 奥村 哲, 平澤精一, 由井康雄, ほか: Malignant Priapism を呈した直腸原発転移性陰茎腫瘍. 泌尿紀要 **30**: 205-215, 1984
- 6) 本多正人, 亀岡 博, 三好 進, ほか: 続発性陰茎腫瘍の2例. 泌尿紀要 **31**: 2273-2279, 1985
- 7) Matthewinan PJ, Oliver RT, Woodhouse CR, et al.: The role of the chemotherapy in the treatment of penile metastases from carcinoma of the bladder. Eur Urol **13**: 310-312, 1987
- 8) Ben-Yosef R and Kapp DS: Cancer metastatic to the penis: treatment with hyperthermia and radiation therapy and review of the literature. J Urol **148**: 67-71, 1992

(Received on February 18, 1999)

(Accepted on August 2, 1999)